



ひとつひとつ

努力して高めていきたい

笠置町

楠瀬 裕子さん

楠瀬さんは帰宅時、道ばたで「おかえり」と声をかけられるので「ただいま」と答えるそうだ。地域の人との距離の近さがよくわかる。

笠置町の保健師として1年目だが、実は、臨時の保健師として隠岐の島で1年間働いていたことがある。もともと僻地医療に興味があり、実習も隠岐の島で経験した。小さな島には島のことを知り尽くしたベテラン保健師がいて、周りの機関や島民と一緒に地域の健康を守っていた。この時の経験を通して保健師という仕事が好きという思いが培われた。

現在の業務は主に母子と予防接種の担当だが、保健師が2人しかいないため先輩と協力し合って業務を行っている。笠置町の出生数は年平均5～6人。保育所の子どものことは名前覚えてる。

「保育園がひとつしかないこともあり、連携はよく取れていると思います。どんな子なのか健診時以外の普段の様子も先生に教えてもらっています。」

保健師が保育園と連携が取れていることは、親にとっては理想の環境だと思ったが、新人保健師さんらしい焦りもあるそうだ。他市の保健師には母子のみの担当という人もいて、健診で着実に経験を重ねている。

「同期の保健師がどんどんプロになっていると感じます。笠置の保健師としてオールマイティーに活躍できるのが理想ですが、ひとつひとつを自分で努力して高めていけたらと思います。」

1年目から多様な仕事を任されているが、これからやりたいことはいっぱいある。

「まだ勝手に思っているだけなんですけど、高齢者と子どもと一緒に活動できる事業ができたと思っています。怒ってくれたり慰めてくれたり、いろんな人の反応があった方が子ども達の成長にとっても良いのでは、と思います。」

その為には、関係する部署や団体をお願いに行かないといけないんですが、と話す楠瀬さん。住民さんとの距離が近いだけでなく、役場内の職員同士の関係も近くて、のびのび仕事をしている感じが感じられた。